

近代を先導してきた米国女子大学の スポーツ健康文化：競存から共存へ

山口 順子

はじめに：近代女性のスポーツとその歩み

新しい時代を担う女性の出現には、「自分にもできるかもしれない」、「自分たちもやってみたい」と新しい世界を希求する女性の息吹を感じる。

20世紀初頭の時代の変わり目、新しい女性（The New Woman）の登場は、新しいゲーム（競争と協力）の創出とも無関係ではなかった。アメリカ合衆国（以下、米国またはアメリカ）、マサチューセッツ州ノーサンプトンにあるスミス大学（私立女子大）の女性指導者センダ・ベレンソン（Senda Berenson, 1868-1954）は、健康診断の導入、姿勢とフィットネスの改善、そして「美しく、強い女性：Womanly Grace and Athleticism」の育成を志向した（Redmond, 2012）。女性がスポーツで競い合うことに制限があった時代、ベレンソンはネイスミス考案の男性がするバスケットボールから切り離して、女性が安全に楽しめる女子用バスケットボール（新しいゲーム）を考案（1899年）し、ルール作成委員会の議長についた。そして、現代にもつながる実践組織を設置し、女性や女子を新しいゲームの虜にしていった。さらにベレンソンの活動はバスケットボールにとどまらない。後述するボストン体操師範学校（BNSG：Boston Normal School of Gymnastics）^{注1}で学んだ、解剖学、生理学などを駆使し、ストックホルムでスウェーデン（教育）体操とフェンシングも学び、研究会を開くなどその活動は現在の指導者に引けを取らなかった。ベレンソン考案の女性用バスケットボールはきわめて短い間に広まり、それは、C.M.K. アップルビー（プリンマー大学女性指導者）がはじめたフィールドホッケーとともに全米女性競技の代表となった。

アスレティシズム（athleticism）とは、19世紀英国の中産階級に生まれ

た「スポーツで心身ともに健全な人間育成」を志向する教育思想である。アスレティズムの拡がりにより、スポーツの原義（遊び、気晴らし）は薄れ、アメリカではとくに専門的な理論のもとに「体力や技量を競う」成果重視の競技志向が強まっていく。しかし他方において、ビジネス、医師、法律などの専門職につく女性も少しずつ現れはじめ、女子大において人間生活・生命の質の改善を目的とする、もう一つの「健康文化」の流れも進展していた。とくに、「心と（様々な）わぎの成長」から「調和のとれた全人教育（education for a whole person）」を志向する健康文化が広がり、「新しい女性と新しいゲーム」、そして「姿勢とフィットネスの改善」は、パブリックな視点で「個人の成長と社会進出」を象徴するアイコンとなった。

しかし、先取りに長けていた名門女子大学においても、当時、スポーツ競技の対外試合は厳しく制限されていた。100年以上前、女性のスポーツ活動に絡みつく社会の偏見と希望、長きにわたる苦悩とその出口。20世紀初頭の米国東海岸の名門私立女子大学「セブンスターズ」^{注2)}における「競争と共存のはざま」を生きた女性指導者の活動の実際はどのようなものであったか。外部にはほとんど知られて来なかった近代女性高等教育（女子教育）におけるスポーツ健康文化の開花する実際を調査することがここでの目的である。

本稿の背景と主な流れ

近代米国東海岸の名門私立女子大学における女性高等教育のスポーツ健康文化を照射するにあたり、研究対象とするのは、プリンマー大学（Bryn Mar College : BMC）^{注3)}のスポーツ・健康・衛生教育の女性リーダーの活動であり、その影響がアメリカ全土に広まった状況である。そこで、もう一つのセブンスターズであるウェルズリー大学、及び、その影響を受けて発展した州立のノースカロライナ女子大学（North Carolina Normal School: 1891～1919、NC College for Women: 1919～1963、UNC at Greensboro: 1963～）の教育を担った女性リーダーの取組みをも参照していく。調査方法は、それぞれの教育機関が所蔵する歴史資料、ならびに関係者との会見内容の検討である。

現地調査は、2013年9月（BMC）、2014年9月（UNCG）から2017年にかけて実施した。^{注4)}

ここで本稿がプリンマー大学を主要な調査対象とする理由を簡単に述べておきたい。それは、第一に、プリンマーが日本の女性高等教育機関の一つ「女子英学塾（津田塾大学の前身）」を創設した津田梅子が留学した大学である

こと^{注5)}、第二に、全米の女性・女子のスポーツ教育に多大な影響を及ぼしたプリンマーの女性リーダーのゆぎない信念と苦難に照射する必要があると長年考えていたこと、からである。

更に言えば、創立者津田梅子の教育が、現在の津田塾大学の建学の精神である All-round women (全人教育) の一旦を担うウェルネス教育の中にも継承されているからである。ここでは、津田塾大学への欧米のスポーツ・健康文化の導入について詳細を述べる余裕はないが、関連する事実は適宜言及していく。^{注6)}

なお本稿において「Physical Education」の語は、日本の(文科省の)学習指導要領が示す「学校体育」よりも広い領域を含むため、原語のまま、または「身体教育」の語も使用し、中等教育の場合には「女子の体育」、「女子のスポーツ教育」などの表現を採用していく。

その背景には、医療と教育分野を母体に発展してきた Physical Education や Sport Science が研究領域として組織化されるのが、1960年代後半から70年代の初めであり、変化する時代の中で、「スポーツ科学」および「身体教育」の学問(Academic Disciplines)と教育職(Profession)をどのように整理するかという現代的課題があることも付記しておく。これは、人間の根源的な存在のありように関わる、活動する人間の内的経験を把握する現象学的方法論(Phenomenological Approach)の課題でもある。

アメリカの私立女子大学におけるスポーツ競技の誕生

英国ヴィクトリア朝時代(1837-1901)の女性スポーツ・身体活動は、長閑な楽しみごとであった。それはまたアメリカにおいても同様であり、女性が競技に関わるのは適切なこととされなかった。女性は、生理の時期は身体活動だけでなく難しい思考活動も避けるようにと医師は指導していたのである(Bell, 2008 他)。

そう考えると、女性のスポーツ活動は、この100年の間に飛躍的に発展している。たとえそれが、ひと握りの女性によってなされたものではあれ、長い間信じられてきた従来の女性観は、ぬりかえられてきた。生活様式の近代化、価値観の多様化にともない、社会が女性のスポーツ活動を(積極的に)受け入れ始めている。

Participation Rates

<u>H.S Varsity</u>	<u>1972</u>	<u>2001</u>
Female	294,015	2.8 million
Male	3.7 million	3.9 million

<u>College Varsity</u>	<u>1972</u>	<u>2001</u>
Female	29,977	150,916
Male	170,384	208,866

Developed by: National Association for Girls and Women in Sport, 2003.

こうした女性のスポーツ活動の発展の要因を、「教育における性差別を禁じた米国連邦政府の法制化「タイトル (IX) ナイン」(1972 制定、1978 実行)」によるものとする見解が多いのも事実である。例えば、全米の女性・女子のスポーツ団体 (NAGWS、2003) の (表 1) が示すように、ハイスクール (H.S.) の女子選手は、1972 年は約 29 万人、2001 年は 280 万人と 10 倍近い増大である。大学においても、1972 年の 3 万人から 15 万人へと増加し、女性選手の増大傾向は確かに明らかである。女子の運動参加率で表現すれば、1972 年の 15% から 2001 年には 43% に上昇した (Carpenter & Acosta, 2005)。その意味ではたしかに「タイトル (IX) ナイン」以降、女性の競技スポーツに対する認知は高まった。しかし法整備に至るまでの長い間、女子大学の教育については外部にほとんど知られて来なかったことも事実である。

しかも、女性にとって、スポーツとの関わり方は一様ではない。オリンピックの女子候補選手として高度な競技に参加する女性もいれば、毎朝、ジョギングに汗を流したり、治療のために日課としている女性もいる。さらには、身体教育やスポーツ科学の研究者として、スポーツに専念する場合もあるかもしれない。また逆に、女性の競技志向は男性に比して低いとする見解もある (ワイス、1969)。しかし女性の「スポーツ参加と認知の機会」がほとんど存在しなかった場合には、参加者としての居場所を見つける機会もなかったであろう。単純に比較することはできないのである。

そして、19 世紀後半に始まるアメリカの女性参政権獲得運動の推進、1920 年の女性参政権が認められた、女性観の変化も考えられる。このような様々なレベルでスポーツに関わる女性にとって、スポーツとは何なのかという根源的な問いかけを念頭におきつつ、幾世紀にもわたるこれまでの男性優位の

社会に女性はどのように侵入してきたのか。女性の高等教育の場に誕生した女性リーダーの活動に照射することから始めたい。

英国人 C.M.K. アップルビーの出現：すべては出会いから

C.M.K. Applebee (1873-1981; 以下アップルビー、学生はアップルとも呼んだ) は、アメリカにフィールドホッケーを導入した英国 (Essex) 生まれの女性指導者である。(写真参照、①)

1900年、アップルビーは、ロンドンの研究展示場で、ハーバード大学のダドリー・アレン・サージャント (Dudley Allen Sargent, 1849-1924) の人体計測学に基づいた「健康フィットネス」の研究を目にする。研究に惹かれてサージャント博士に手紙を出すと、翌年の夏期セミナーに参加することを勧められ、そこに出席したのが全ての始まりである。(参加者はクラスの集合写真を数えると約100名である)。

ちなみに、サージャント博士とは、日本の学校体育でも馴染みの「体力診断テストの垂直跳び」(サージャント・ジャンプ) を考案したフィットネスのパイオニアである。サージャントはスポーツ科学に造詣が深く、後にウェルズリー大の健康・衛生部門 (1909) の立ち上げにも関わっている。サージャントは、独自の研究グループをもち、女子大の教育に与えた影響も極めて大きい。

ハーバードのサマークラスで、英国と米国女性のフィットネスやスポーツ活動の違いが議論になると、仲間の求めに応じてアップルビーは体育館の中庭でイギリス流のフィールドホッケーを披露した。そこに参加していたのが、セブンスターズの女性指導者たちである。ヴッサー大の女性リーダー (ハリエット・バレンティン) がまず大きな関心を示し、そこから毎秋、ヴッサー、ウェルズリー、スミス、プリンマー大などへの訪問授業が始まった。アップルビーは、ハーバードにも指導に向かっている。1902年には、英国流のフィールドホッケーについての書籍も刊行している。(写真②) そうした活動に注目したのがプリンマーの学長である。

プリンマー大の M.C. トマスとの出会い：プリンマー大での指導がはじまる

1904年、プリンマーの第二代学長、M. ケアリー・トマス (以下、トマス) が、アップルビーを野外スポーツの監督コーチとして招聘した。トマスは全米でもよく知られた教育者、フェミニスト (女性参政権推進者) である。^{注7)}

ちなみにプリンマーに留学していた津田梅子は、当時学部長だったトマス

と出会っている。帰国後の梅子とトマス学長との交流は書簡で確認できる。
(津田塾大学梅子資料室)

3年後(1906年)、アップルビーはプリンマーで physical education 部門のヘッドに就任する。プリンマー大の学内文書には、「アップルビーは医者免許を持たない、physical education 専門の女性ディレクター」と記載されている。それまで身体教育の領域は、医者と教育関係者によって運営されていたので新しい取り組み(驚き)と映ったのである。

アップルビーは、ヴァッサー大のバレンティン、スミス大のベレンソン、ウェルズリー大のディレクターらと協力して、ペンシルバニア州フィラデルフィアに、アメリカ初のフィールドホッケーの拠点を創設する(1906-7年)。その後、州内のポコノ山(Poconos)にあるレクリエーション地域に、フィールドホッケーのキャンプ(合宿所)を開設している。そこからフィールドホッケー協会の運営も始まった。アップルビーが指導する技法のイラストや写真は、全米大学スポーツ連盟:NCAAが、現在、所蔵している。

1909年に、プリンマー大は Health Division(健康部局)を立ち上げ、その一方で女性に適した7つの新しいスポーツのクラブ設立にも取り組んでいった。ところで後述するように、この時期にウェルズリー大は、Hygiene and Physical Education(衛生と身体教育部門)を立ち上げている。女子大において、もう一つの身体教育(健康と全人育成)のカリキュラムが立ち上がるのである。

英国出身の女性指導者C.M.K.アップルビー(略歴)

- ・ 1899 英国ロンドンのスポーツ専門大学で physical educator の資格を取得
- ・ 1901 ハーバードのサマースクールを受講し、ホッケーを実演
- ・ 1904 プリンマーのアウトドア・スポーツのディレクターに就任
- ・ 1906 プリンマーの physical education のディレクターに就任
- ・ 1906-07 全米フィールドホッケーの拠点をフィラデルフィアに設立
- ・ 1909 プリンマーに健康部局を開設
- ・ 1923 夏の間ポコノ山でホッケー／ラクロスのキャンプを開設
- ・ 1924-36 米国初の女性アスリートのマガジン「The Sportswoman」を発行。それによって女性のスポーツが全米に広がる契機となる。

- ・1929年 プリンマー大を退職し、その後はコーチとして訪米
- ・1978年、NAGW (National Association of Girls and Women in Sport) から受賞
- ・1980年、IAIW (Association of Intercollegiate Athletics for Women) から受賞
- ・1981年、107歳で死去。

(プリンマー大学保存の文書参照)

C.M.K. アップルビーと M.C. トマスとの協力

アップルビーは、トマスとともに学生のためのスポーツ教育の推進に取り組んで行く。ヨーロッパの事情に精通していたトマスの助言もあり、授業にウォーター・ポロ（水球）を開設し、テニス、バドミントン、バレーボールなど6種類のクラブも設置した。^{注7)}

女性の社会進出の機会を世界的な視野から構想していた学長トマスは、すでに学生の自治組織を設立していた。しかし学生の自治組織の基盤はできあがっていたものの、運営上の問題を相談するため、アップルビーはトマスをしばしば訪ねたという（資料：アップルビーが語るトマスの思い出）。トマスとの協力的体制のもと、アップルビーは全米の女性や女子のスポーツ競技選手の育成に突出した指導力を発揮して行った。こうした功績は2点にまとめられる。先に述べたアップルビーの経歴とも重なるが、さらに細かく見て行きたい。

アップルビーの2つの先駆的活動

(1) 第一は、1923年、フィラデルフィア・ポコノ山のレクリエーション領域に、夏の間、「フィールドホッケー」と「ラクロス」のキャンプを開設したことである。イングランド、スコットランド、アイルランド、南アフリカ、オーストラリアからも優秀なホッケー選手やコーチを招聘した。当初、300人の参加者が、その後、英国人コーチも含み1000人に増大し、3週間のコースを2回開催した。当該キャンプは、アップルビーが退職後も継続し70年近く続いた。

ちなみに、アメリカのスポーツの原型は先住民の遊びからも多大な影響を受けているが、女性のスポーツ活動にもその影響が見られると指摘する研究もある。周知のようにラクロスの原型は、北米先住民の球戯であり、両手にスティックをもつ“Two Hands Stick Ball”と呼ばれていたが、フランスの宣教師が母国に持ち帰り、ラクロスと命名した。

遊びの背後にある部族の神話や物語の文化研究も20世紀はじめから開始された。

ラクロスについては、ノースカロライナ大学名誉教授ケイト・バレット (Dr. Kate Barrett) に会見し、写真などの提供を受けた。ちなみにバレットは、プリンマーの隣に現存するシプリー (The Shipley School) という全寮制の中等学校に通っていたので、毎夏、アップルビーのキャンプで監督助手をし、ラクロスの元全米代表選手でもあった。その経験から出発し、人間の運動理論を学ぶため、英国の舞踊理論家ラバン (Laban, Rudolf von: 1879-1958) の学校「Art of Movement (動きの空間芸術)」に留学し、全米に知られるムーブメント教育の専門家となる。現在、津田塾大学の身体の知覚・認識を実践的に探求する「動きの教育 (movement studies)」にも繋がっている。

さらにアップルビーの活動期は、津田梅子の後継者である第二代学長星野あい、プリンマー大に留学していた(1906-12)時期とも重なる。プリンマーの授業では、学生全員がフィールドホッケーを受講することになっていたので、星野あいもホッケーを経験していたかもしれない。後に、星野あいから、physical education を学ぶためにアメリカに派遣された津田塾の卒業生、村井孝子(旧姓中島孝子)が留学から帰国すると、津田でも(戦時を避け)フィールドホッケーが始まる。星野あいがおregon大学留学中の村井孝子に、「ホッケーフィールドを準備して待っている」と手紙で伝えていたという話を筆者はかつて聞いている。全米に広がっていたフィールドホッケーが、日本の女子大学にも導入されたのである。

- (2) 第2の功績は、1924-36年の10年間、(英国と米国をつなぐ)アメリカ初の女性スポーツ誌「The Sportswoman」(隔週のマガジン)を編集発行したことである。アップルビーは、雑誌の目的を次のように紹介した。「アマチュアの競技、スポーツ、フォークダンス、その他、女性や女子のための身体活動の開発を支援するとともに、すべてのゲーム愛好者に、遊ぶこと本来の楽しさをひらくものです。スキルを学ぶことへの関心、スポーツマンシップとフェアプレーの精神、健康であることを味わい、すべての女性や女子が、うまくできるかどうかにかかわらず(人がどう見るかでなく)プレーしたいという気持ちになることです」(The SPORTWOMAN 1926年9月、第2巻、第21号)。

しかし、当初、ホッケー協会と共同設立した雑誌が、次第に水球、

バドミントン、陸上、テニス、アーチェリー、フェンシングやバスケットボールなど、他のプログラムを取り込むとともに、様々な種目の技術解説(Q & A コーナー)など、女性アスリートに呼びかけて誌上でコーチングを編集するようになると、ホッケー協会の意向とも合わなくなり、マガジンは10年間で廃刊となった。しかし、元キャプテン(Cynthia M. Wesson, BMC' 09)も指摘するように、多様な女性のスポーツ競技が全米に広がる契機となったことは確かである。後年、全米の女性と女子のためのスポーツ協会から2つの(功労)賞を受けている。

アップルビーの信念と困難：女性の競技活動に対する批難

当時の新聞には、「女性にフィールドホッケーは無理だ」、「姿勢矯正運動(Corrective Exercise)がふさわしい」等の声が強くなり、アップルビーの苦悩が続いた(新聞はプリンマー大図書館保存)。当時は、セブンシスターズの学校間でも試合は認められず、学内の練習が中心であった。さらに physical education の授業を休ませるようという医師の診断書が50-60通も届いたという。さらに、「なぜホッケーが卒業単位なのか」と、現代にも通じるクレームもあり、「ファカルティ対策」として、健康部門を重視する案をトマス学長とも相談したという(資料：アップルビーが語るトマスの思い出)。スポーツマンシップやチームワークの意味、即ち、そもそも人間にとってスポーツとは何かを説明することが困難な時代であった。後に、アメリカの哲学者ポール・ワイス(プリンマー：1930～、その後エール大学に転出)が、『スポーツとはなにか』という人間の根源的なスポーツ活動の意味に関する哲学書を出版するのは1969年である。

アップルビーの強い信念(元選手や連盟関係者の声から)

ハーバード大のDr. サージアントの協力もあって、プリンマー大学、ウェルズリー大学などの先駆的な試みが全米に広がっていくのは、「教育の場での性差別を禁止した連邦法」タイトルIX^{ナイン}(1972)よりもはるか前のことである。アップルビーは「運動にも勉学にも優れるように(有能であれ)と女性の背中を押した」と、全米フィールドホッケー協会前会長(Shillingford)は述べている(NCAA com, 2014, 2017)以下にアップルビーの影響を受けた人々の声をいくつか抽出しておきたい。

・「アップルビーとホッケー物語」をまとめた元選手のM.C. マッキントッ

シュによれば、何もない時代、絶対的存在だったアップルは、一人ひとりに規律を守らせた。フィールドでガムを噛んでいる学生を厳しく叱り、練習が終わるまでドリブルを続ける罰を課したこともあった。ただ、スポーツ競技のため体力面の負荷や競争力をつけることに強い関心を持つことはなかった。合宿練習では厳しい指導が遅くまで続いた。夜は屋内でフォークダンスの円を描く練習をした。後ろ向きに移動しながら、正確なサークルが描けるまで繰り返したという。背後にも目を持つようにという「空間感覚」の練習だったかもしれない。

- ・女性が「競技」することを支援し、擁護する人々は、アップルビーの考えるスポーツや身体運動による全人育成に関心があり、スポーツ経験が、様々な女性の権利を判定する足がかりとして女性の能力を表現できると確信していた。しかし、一部の教育関係者には気がかりな点もあった。「女性には『プレイデイ』や『体育祭』の開催であれば問題ないが、競技会のプレーは、限られた校内の競争であっても、当時は翹楚を買った」と前コーチらは述べる。実際、ヴァッサーとプリンマーのテニスの試合が、ヴァッサー大の教授会で取りやめになったことは事実である（BMC 学内文書）。
- ・アップル自身も語っている。英国のスポーツを経験してきたアップルビーは、初めて学生の練習を見た時に、それは猫の喧嘩のようだったという。チームワークもスポーツマンシップの意味も知らない。服装、防具、履物の説明はもちろんだが、まずチームメイトを作ることをなすべき務め（ゴール）とした。そしてチームの達成はチーム内部の競争に重きをおくことではなく、チームを超え出た視点から主客の目をもつことを意図していた。一人称と三人称の眼差し（セルフコントロール）をもつことと言っても良いだろう。
- ・アマチュアの運動競技という、全人的アプローチに関心を持っていたアップルビーは、スポーツ競技を、女性の権利を守るために協力し合うステップ（足がかり）と考えていたので、全ての女性が何らかのスポーツに関われるようにというのは、フィールドで激しく競争するだけでなく、「女性も社会的存在であり、ホッケーは親睦と友好のゲームなのです」と説いたのである。
- ・しかし、アップルビーの強い信念により葛藤や軋轢が生じたこともあったという（指導を受けた元選手：NCAA com, 2017）。ホッケーを手段に、アスリートとして、リーダーとして活動するために、アップルビー自身

がルールを作り、練習の場で厳しい言葉を投げかけた。新聞など様々な批判ともつねに戦っていたので余裕はもろくなかったであろう。だがアップルビーが編集したマガジンと夏のホッケーおよびラクロスのキャンプにより、全米における女性の運動競技が大きく推進したと関係者は口をそろえる。

- ・1973年までアップルビーは公の試合の場で、監督や指導者として名前を出すことをしなかった。チャンピオンとなり、商品を手に入れることが、嫉妬や不当な圧力を引き起こすことにつながるとも考えていたが、現在のように、ジェンダーは社会的文化的に作られた性であるという考えも広まっていない時代、女性のスポーツがもたらす意味や豊かさを説くのは容易ではなかったのである。

アップルビーが抱いた未来への危惧

アップルビーは、退職時に「すべての学生に必修でホッケーを経験させることにした理由」について語っている。すべての学生たちが（幾世代にもわたって）、純粋にゲームを楽しみ、フィットネスを改善し、友情を育むことを願っていると、その思いを次のように述べた。

「プロフェッショナルリズムによって弊害が起きないように、あなたの子供や若者が最後の砦となって、（フィールドホッケーをはじめとする）スポーツの本質が失われないようにそれを見守ってほしい」というのである。

これは、アップルビーが、将来のスポーツのあり方を危惧して、まさに現代への指針となる貴重な言葉である。一般に言われるように、スポーツ参加者が増大すれば、競技志向がいつそう盛んになる傾向がある。宇宙開発に向かう科学技術の急速な進展の中、資本、身体と技術開発に価値がおかれ、アップルビーの危惧した競技中心のスポーツのあり方が歪んだ形にならないように、後世を生きる者に託されたのである。

もう一つの身体教育：姿勢とフィットネスの改善

欧米では産業技術の革新、社会構造の変化にともない、人々の生命エネルギーが余暇活動に向かい、スポーツへの強いあこがれが開花していく時代。英国のオックスフォードやケンブリッジ大に進むパブリックスクール（エリート校）ではスポーツによる人材育成が盛んになり、筋骨たくましいキリスト教徒の育成運動（Muscular Christian Movement）はアメリカにも伝わり、米国東部の名門私立大が結成するアイビーリーグのボートレースなど（定期

戦)が頻繁に実施されていた。まもなくすると19世紀後半に3つの身体育成の師範学校が開設される。その中でも気鋭の学校が、本稿の冒頭に述べた少数精鋭のボストン体操師範学校であった。BNSGは1904年まで共学であるが、1905年から女性指導者のための養成機関になる。^{注7)}

当該校は、アメリカ南部の貧困層の子供の教育にも尽力した資産家ヘミンウェイ (Mrs. Hemenway, Mary) がスポーツ学会とともに、料理法の会議を開催し、その後、ボストン体操師範学校として開設した(1889)ものである。そのディレクターに、全米で名声のあった女性リーダー、エイミー・モーリス・ホームズ (Homans, Amy Morris, 1848-1933) を任命した。ホームズは、女性や女子の健康づくりを意識して、様々な道具を使ってするドイツ式体操やスウェーデン体操、そして最先端の生理学や心理学の講義を準備した。1909年、そのBNSGが、ホームズとともに、リベラル・アーツ・カレッジの名門ウェルズリー大の Hygiene and Physical Education (1909～) に吸収併合されたのである。1917年、ウェルズリー大に開設された当該部局には、32種類の専門プログラムが用意され、様々な学校から専門プログラムに合致した女子学生が選抜された。全米の関連学会でも名高いホームズがディレクターであったこと、またサージャントの協力もあり、ウェルズリー大など、女子大の身体教育のプログラムは全米中に知られるようになった。プリンマー大が健康部門を設置したのも同時期である。アップルビーはBNSGにも指導に出向いている。多くの女性リーダーが、スポーツ科学・身体教育学の研究に参画していった。ホームズの名は、現在も、AAHPERD (American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance: 健康・身体・レクリエーション・ダンス連合学会) にホームズ賞を始め、NAKHEの冠講座として現存している。

1920年代は、全米の女子大学の学生数がかつてないほど増加する。例えば、ノースカロライナ女子大では、1919年に784人、1929年には1888人と2倍を超え、全米で2番目に大きい学生数になる。教育内容は、1909年にフィールドホッケー、1910年にテニスやバスケットに加え、キャンプやハイキングなどのレクリエーション教育も実施されていく (Trelease, 2004, 81-87)。補足すると、1920年は連邦政府が公衆衛生や社会の健康を指導する大学に補助金を出すようになった年でもある。

その時期、ホームズの学生だったM.C. コールマン (Mary Channing Coleman) が、スコットランドなど海外での様々なキャリアを経て、州立ノースカロライナ女子大学に赴任(1920)し、速やかに健康・身体教育・ス

ポーツ・レクリエーション（余暇教育）など多様な人間のあり方を配慮したプログラムを開講し、1924年までに医務室（保健室）と専門指導者の設置も行なった。コールマンはコロンビア大、ウェルズリー大のホームズの physical education 指導を経て、女子の身体教育の指導者養成を実施し、1933年には AAHPER の会長を務めた女性リーダーである。このことは学生たちにも語られている（Umstead, 1967）。コールマンの肖像と名前は、現ノースカロライナ大学に「コールマン・ジム」として残っている。

ところで興味深いのは、こうしたアメリカの初期の女性指導者であるベレンソンもアップルビーも、共に子供時代に肉体が脆弱であり、それを学校体育によって克服したことから、身体教育の場で働くことを生涯の目的にしたという強い信念を持っていたことである。

こうしたアメリカでのスポーツ・健康文化の潮流は、近代日本の女性高等教育機関の設立とその発展に影響を与え、欧米をモデルにした津田塾大学のカリキュラムにも結実していくのである。

さらに、津田梅子の帰国と入れ違いに、日本政府が女子体育の指導者として派遣した井口阿くり（1871-1931、現御茶ノ水女子大卒）の留学先（1899.8.-1903.2.）もスミス大学であった。^{（注8）}

現代への示唆：競存から共存へ

こうして20世紀は、多くの女性がスポーツに参加し始める時代であった。しかし、女性のスポーツが社会に受け入れられたといっても、初めは、スポーツに関わる女性を用いて製品を売るといったような広告のため（CM目的）であったり、一種の変り種や評判になったものを新聞が扱うといった場合がなかったというわけでもなかった。

女性が男性の世界に入った時、当然女性は、範とすべきモデルを男性に、あるいは男性のつくりあげた世界の中に求めた。男性のモデルを忠実に写しとることが唯一、自分の成功につながると信じたのかもしれない。いきおい女性は、男性の服装や、ヘア・スタイルまでもまねたのである。風貌だけでなく、行動様式も「男性的」な環境と一体化した方が便利だったのかもしれない。しかし所詮、女性は男性ではない。女性が男性をまねればまねる程、男女は異なっているという事実を強調することになる。男性も、自分たちをまねて競いあってくる女性を不気味に思い、そういう女性を自分達から遠ざけたこともあったろう。

しかし女性も、次第に男性の世界に慣れるにつれて、男性と同じ姿を示す

必要がないことを認識し出し、次第に、自分らしく生きて良いと思うようになっていった。また、どのような仕事であれ、自分達の仕事があまく行われることができ、あるがままの自分としてふるまってもなお好まれていることを知るようになるにつれ、女性は、男性が参加しているスポーツ種目のリストから自分達に適するものを選び出すようになった。そのため自分達のニードにあわせて自分達自身のルールをつくり、試合についての女子の基準を確立してきたのである。また男性の指導の仕方に問題を感じることもあったかもしれない。ここに女子の教育は、自分達女性がリードしていかなくてはならない、とか、女性の方が学習者の特性をよく知っており、男性よりも効果的に始動できるという、「女子の身体教育（体育）は、女子の指導者の手で」というスローガンに代表される指導理念が描かれるのである。アメリカにあっては、この理念は、“Separate but equal”（Gerber,1974）という女子体育やスポーツ指導者の主張となるのである。このような女性指導者の主張は、様々な制度改革となって結実した。1923年には、米国連邦政府は女性のための部会（Women’s Division of Federation）をつくり、これも、スポーツの機会をすべての女子にも、男子と平等に提供するための基礎となった。たとえば、この部会は、女性スポーツの宣伝利用を防止するとともに、女性のリーダーシップ、医学的検査、国際試合の必要性などを強調したのである。そして、記録を作る目的のためにプレーするのではなく、プレーの喜びによって動機づけられることが必要であるという考えを後に前面にうち出していくのである。近代を先導してきた女性たちの思いであった。

第2次世界大戦後、女性にも数多くのスポーツ参加の機会が与えられた。しかし、当時はまだ、女性の参加するスポーツは、いわゆる「女らしい」スポーツに限られ、スポーツの中で、ある種の選別が暗黙のうちに行われていたのである。こうして、水泳、テニス、乗馬、スキー、体操などが女子に受け入れられ、ソフトボール、バスケットボールや陸上は、女らしくないものと考えられることもあった。

その後、スポーツにおける技術のレベルアップを望む声も、大学を中心に起こり、アメリカ合衆国のオリンピック委員会も（女性や）女子の競技に関心を示し、女性（女子）部会を組織した。また、1967年に、DGWS（The Division of Girls and Women’s Sports）も、女子の対抗競技の委員会をつくり、国内選手権を含む、女子の適切な対抗試合の機会を用意するようになるのである。

こうして、健全なレクリエーションとしてだけではなく、技術レベルの高

い競技としても、女性や女子はスポーツと関わってくるのである。女性解放運動が、20世紀のこのような女子スポーツ活動の拡張を背後から支えていることは前にも述べたとおりである。

さらに、1960年代のアメリカの公民権運動は、女性の政治上の差別を撤廃することを目指ただけではなく、人間の権利に関わる範囲それ自身を問題にすることによって、女性のスポーツ活動上の差別の撤廃を求めた。そして、人種間の差別を禁止した公民権法（1964年）に引き続いて「タイトルIX ナイン」——教育における性的差別を禁止した法律——が、1972年に制定されたのである。つまりこの法律の基本的なねらいは、「アメリカ合衆国においては、国から資金的援助を受けている教育計画や教育活動の下では、いかなる人も性によってそれらへの参加が除外されたり、あるいは恩恵を受けることが拒否されたり、差別的に取り扱われることはない」というものである。この法律が完全実施に移されたのは、1978年の夏からであった。だが、この法律の実施によっても、未だ、アメリカで一般の女性や女子のスポーツが、現実の生活の中で完全に保障されたとはいえないということを付記しておく。

しかし女性とスポーツに関わる様々な雑誌の記事や書物が出版されたり、大学の女子のスポーツクラブなどにも活発な動きが当時見受けられたことも事実である。筆者が70年代後半に滞在していたノースカロライナ大学でも、1978年には、さっそく女子のラグビー・チームが編成され練習をしていた。そのような状況を背景にしてある男子学生は、女性のために自分はもうドアを開ける必要はない、レディー・ファーストなどと言ってられない、と述べていたのが印象的だった。それが現在では、女性ラグビーがオリンピック種目となり、社会的認知を得ているのだ。また、すでによく知られるように、当時は、“man”を“person”に言いかえたり、文献のタイトルも“Man and His Movement”が“Man and Movement”に変わったことなどは、当然のこととして学生に受け入れられていった。

多くの女性指導者たちの努力もあって、女性はたしかに、スポーツとの関わり場を広げてきた。その歩みは決して直線的なものではなかったとはいえ、男性と同じ質のスポーツ活動に参加する機会を求める方向に進んできたといえる。ある意味では、女性はあらゆる機会をつかまえて、むしろ男性よりも貪欲にスポーツの夢を追い求めてきたのかもしれない。今日では、スポーツする女性にとって男性は、対抗相手でもなければ、もちろん媚びる対象でもなく、むしろ身体運動の意味を探求しようという同じ目的に向かって進む

パートナーとなっている。

長い間にわたってつくりあげられてきた女性のスポーツ活動に関わる神話や伝統的な考えを完全にぬぐいさるのは非常に困難である。しかし女性が、自覚的に適切なプログラムを企画し、それにチャレンジしていくことによって、身体活動やスポーツとの出会いを一つの喜びとして、女性が真の人間となるために、自己の能力をはっきりと認識しそれを伸ばす活力を与えてくれるものと、スポーツや多様な身体活動をみなしていくことが必要なのである。

だが、もし女性自らが、そのような条件を生かさないならば、せっかく拓がった場も、画餅に帰してしまうだろう。必要なのは、例えば、女性の生理学的なキャパシティが男性よりも劣るという神話が事実をもってぬぐい去られたように、既成の定型化した様々な神話や偏見を払拭しうるような事実をさらに着実に積み重ねていく事であろう。そのためにも、女性による研究活動や女性を対象とした研究が一層増えることも望まれる。近代を牽引してきた先人たちの努力を無駄にしないように努力を続けていくことであろう。

誰も置き去りにしない、生きづらさを感じているすべての人たちのために、「誰もが自分らしく輝ける場」を模索するきめ細かな対応の検討も始まっている。学校・大学が直面する「性的指向」などに悩まされることなく学べる教育環境づくりの研究もアメリカの女子大学で活発に始まっている（高橋、2017）。

終わりに

今回、歴史資料を見ていて発見したことがある。先に触れたように、アメリカの哲学者ポール・ワイス (Paul Weiss, 1901-2002) は、ハーバードの大学院を終えてから世界をめぐり、その後、プリンマーの哲学担当者として赴任した (1931年) が、1945年エール大に転出し、1969年退職 (名誉教授) 時に、『Sport, A Philosophic Inquiry』 (邦訳: 片岡暁夫) 『スポーツとは何か』) を出版した (1969年、邦訳 1985年)。そして、1972年、まさに「タイトル IX^{ナイン}」が法制化された年に、国際スポーツ哲学会 (Philosophic Society for the Study of Sport: 現 International Association for the Philosophy of Sport) を設立し、初代会長に就いたのである。アップルビーと入れ違いで、両者の繋がりはないが、ワイスは、エールでもアイビーリーグの試合が盛んであるし、プリンマー時代にも学生たちの活動を垣間見ていたであろう。本の中でも「女性競技者」について書いているので、その最後の一説を、以下に記しておきたい。

「スポーツは若い人にとっても、卓越に開かれていく最も有望なものである。不幸にも、スポーツに捧げられたどのような経歴が、まさしく男性、女性どちらにも重要であるかについて、はっきりと、かつ十分に具体化された知識を誰も持っていない。それについて今日最もよく主張されていることは、性急に経験をまとめたもの、つまり少なからぬ偏見と希望を含み、限られた実験からの産物である。もし私たちが、あるスポーツでなされたことと、別のスポーツでなされたことをどのように比較するか、そしていろいろなスポーツがどのように関連づけられるかを知るならば、もっとしっかりした基盤に立つことになる。なぜならば、そうしてはじめて、私たちはそれらすべてを私たちの前に位置づけることができることだろうし、そしてそれらのスポーツが個別に、合わせてアマはもちろんプロにも、男性はもちろん女性にも、(障がい者はもちろん高齢者にも)、つまり人に対して何を意味しうるかを理解することになると思われるからである。」(カッコ内、および傍線筆者)(片岡訳1985, P. 247)

謝辞：プリンマー大、ノースカロライナ大での調査を終えて

アップルビーが所持していた沢山のクリスマスカード、旅先からの絵はがき、所蔵していた書籍などが大学のアーカイブに収納されていた。アップルビー自身は(スポーツする意味について)書籍を執筆していないが、キャンパス内外での活動がわかる書簡や学内文書、また学生が共同執筆したアップルビーに関わる小論などが現地調査の成果だった。現在、プリンマーにはアップルビーの名をかぶせた立派なホッケー場があり、また、オリンピック規格のプールもある。アスレティックジムの入口には、大学当初からのスローガン“Smart Women, Strong Women”も掲げられ、立派なフィットネス・スタジオは学生および教職員に開放されていた。

今回、近代を牽引してきた女性リーダーの活動や言葉は心に深く届く貴重なものであった。プリンマーの図書館専門担当者はもちろん、スポーツマネジメント専門でホッケー指導をしている担当者にも会見できた。また、かつてノースカロライナ大学(グリーンズボロ校)で指導を受け、すでに退職された教授たちからも資料入手だけにとどまらない貴重な交流をいただけた。

註

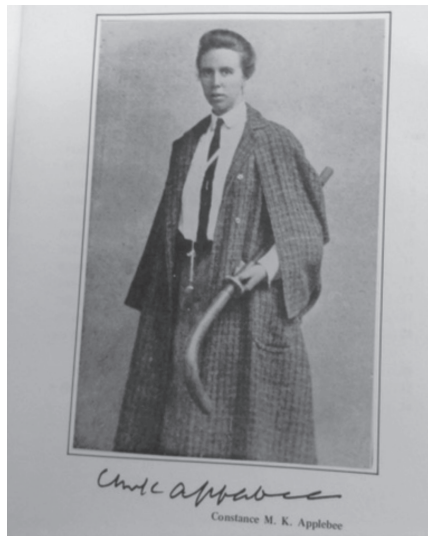
- 1) 1889年、慈善家ヘミンウェイ (Mrs. Mary Hemenway) の資金でボストン師範学校 (Boston Normal School of Gymnastics) が開設された。当該校は、スポーツ競技ではなく、様々な器具を使ってするスウェーデン体操などの身体運動とともに、生理学、心理学、衛生学などを不可欠な教科とし、身体トレーニングを安全に指導することを目指していた。当初は、共学であったが、まもなく女性の指導者養成機関となった。当時としては極めて先駆的な学校で、冒頭で述べた、スミス大学の女性指導者ベレンソンは、ホームズによって推薦された当該校の卒業生である。
- 2) セブンシスターズ (Seven Sisters) はバーナード、マウントホリヨーク、ラドクリフ、スミス、ウェルズリー、ヴァッサー、プリンマー大であるが、後にヴァッサーは共学化 (1969)、ラドクリフはハーバード大に合併されて現在は6校。すべてがリベラル・アーツ・カレッジである。
- 3) アメリカペンシルバニア州にあるプリンマー大学の現地調査、図書館の Special Collections (学内文書、各種書簡、写真などの歴史的資料) の読み解き、また国内外のデジタル・アーカイブズ、および関係者へのインタビューの整理を中心作業とした。さらに20世紀初頭の米国女子大学の歴史的背景を理解するため欧米のスポーツ文化研究の文献も参照した。
- 4) 米国北東部にある7つの名門私立女子大の一つ、プリンマー大学 (Bryn Mawr College, 1885 設立) は、米国女子大初の学士号を授与した大学である。セブンシスターズと呼ばれる女子大は20世紀初頭、全米の女性スポーツ・健康・身体教育の拠点であった。
- 5) プリンマーの当時のトマス学長と梅子との交流については、高橋裕子「M. ケアリー・トマス：傑出したアメリカ女性と梅子の接点」 in: 飯野正子・亀田帛子・高橋裕子編『津田梅子を支えた人びと』有斐閣 (2000) から多くを知ることができる。
- 6) さらに津田梅子にかかわる女性文化関係の資料は、大学100周年誌や梅子研究の関係者により数多く出版されているが、建学の精神を健康・ウェルネス研究や身体文化にかかわる視点から読み解く研究はまだはじまったばかりである。
- 7) トマスは、エール大で聴講もしているが、当時、アメリカの大学では女性に博士号を出すことが認められていなかったため、ドイツの大学でも学び、スイスのチューリッヒ大で博士号を取得したので、ヨーロッパのスポーツ事情にも精通していた。詳細は、高橋裕子 (2000)。
- 8) 女子用バスケットボールはスミス大学から始まったが、後に日本政府が女子体育の指導者として派遣した井口阿くり (1871-1931) の留学先 (1899.8.-1903.2.) もスミス大学である。井口は、2年目から、ベレンソンによって BNSG で学ぶことを勧められ、A.M. ホームズの指導も受け、日本にスウェーデン体操とともに女子のバスケットボールを普及させた日本の女子体育の先駆者と言われる。勤務先は東京女子高等師範学校 (現・御茶ノ水女子大学) (興水はる海「井口阿くり考—外国留学生報告書をめぐって—」『御茶ノ水女子大学人文科学紀要』第29号第2号、1976年、Pp. 39-54)。

参考文献

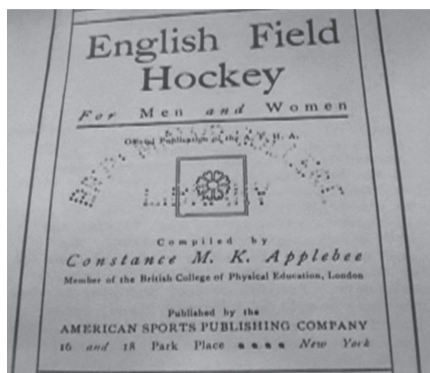
1. Applebee, Constant M.K. (1975?) . Recollections of M. Carey Thomas of Bryn Mawr by C. M. Applebee, (Edited from recorded interviews with Helen Bell de Freitas and Louise Morley Cochrane) 2時間近い会見(未刊行資料、1975年頃)その他、Interview in College News: October 4, 1974. Pp.1, 15, 6.
2. プリンマー大学所蔵の学内文書を参照。また、Constance M. K. Applebee and the Story of Hockey, by Hilda Worthington Smith, and Helen Kirk Welsh, Bryn Mawr, 1975、および、NCAA com の全米大学スポーツ競技連盟所蔵の写真及びYouTube上の元ホッケー協会会長、元選手らが語るアップルビーについての記事を事実確認のため適宜参照した(NCAA com, You Tube, 2017,2018)。
3. Applebee, C. M. K. English Field Hockey for men and women; official publication of the A.F.H.A., comp. 1902.
4. Bell, R. C. (2008). "A History of Women in Sport Prior to Title IX," U.S. Sports Academy.
5. Geadelmann, P.L. et.al., Equality in Sport for Women, AAHPER, 1977.
6. Gerber, E.W., Felshin, J., Berlin, P., & Wyrick, W. (Eds.). (1974). The American woman in sport. Reading, MA: Addison-Wesley.
7. Oglesby, C.A., Women and Sport: From Myth to Reality, Philadelphia; Lea & Febiger, 1978.
8. Park, R.J., & Hult, J.S. (1993). "Women as leaders in physical education and school-based sports, 1865 to the 1930s." The Journal of Physical Education, Recreation & Dance, 64 (3) , 35-40.
9. Redmond, J. (2012). "Gender, Education and Embodiment," Posted in: Blog of The Albert M. Greenfield Digital Center for the History of Women's Education at Bryn Mawr College, July 2, 2013.
10. Swanson, R.A. and Spears, B. (1978, 1995). History of Sport and Physical Education in the United States. (Fourth Edition) Coleman, Mary Channing, p.183.
11. Trelease, Allen W. (2004). Making North Carolina Literate: The University of North Carolina at Greensboro, from Normal School to Metropolitan University. (Durum, North Carolina: Carolina Academic Press) Pp. 87, 111, 362-363, 413, 639-59.
12. Trelease, Allen W. (1991) . Changing Assignments: A Pictorial History of the University of North Carolina at Greensboro.
13. 高橋裕子「トランスジェンダーの学生受け入れとアメリカの名門女子大学—もう一つの『共学』論争後のアドミッションポリシー」三成美保編著『教育とLGBTIをつなぐ：学校・大学の現場から考える』青弓社、2017年
14. Umstead, Elizabeth Claire, "Mary Channing Coleman : Her Life and Contributions to Health, Physical Education and Recreation." Ph. D. dissertation, University of North Carolina at Chapel Hill, 1967.
15. Weiss. Paul (1969) . Sport, A Philosophic Inquiry : 片岡暁夫(1985)『スポーツとは何か』不昧堂
16. 山口順子「自立した女性の育成をめざす—津田塾大学」有馬真喜子・原ひろ子編『時代を拓く女性リーダー：行政・大学・企業・団体での人材育成支援』明石書店、2008年

17. 山崖俊子・山口順子共編著『健康教育：表現する身体』勁草書房、2015年

* 本研究は、「近代日本における女性スポーツ教育にみるグローバル化への先駆的展開」日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書（研究分担者）2017年5月の一部である。国際スポーツ哲学学会（2017IAPS）では、以下の演題で発表した。Yamaguchi, J. (2017) Emerging Sports Illuminate the Early College Sport for Women. The 46th International Conference for the Philosophy of Sport, Abstract Book & Presentation, Whistler, BC, Canada.



若き日のアップルビー
（プリンマー大学所蔵）



アップルビー出版物（1902）